

沓岐島の地下水について

林 徳 衛 *

1. 緒言

海拔212mの丘を最高とする程に低平な丘陵の起伏する沓岐島は、古来人煙豊かで「魏志倭人伝」の頃既に「三千許家あり」。「和名抄」の頃には、「田地の数620町歩」も開墾されていた。今日では全面積38km²の、34%が耕地となつて、開拓は限界を越しているので、一夕暴雨に襲われると、忽ち地表水の氾濫を来す程であつて、本籍人口7万人の中、2万人は島外出稼ぎのやむなきに追いつめられている現状である。そしてこの島の特性とも言えることは、延々と起伏する玄武岩台地の常として、海岸聚落の他は、全部が農林生活に依存し、しかも完全な点在散村を形作つており、民家は島内隅なく散在して、聚村をもたないことである。

こうした村落形態の可能性は、一部政治的な技巧の上に形成された事もあつたが、今日尙これが依然として保たれ得る前提となつたものは、地形と水とであろうことは争えないであろう。たとえ如何に封建的権力をもつても、地理に反し、水に合致しない生活は永續するどころか、いつかは執り改められるものであるから。

2. 地形一般

沓岐島は、遼日本海アルカリ岩石区の一部として、広範囲にわたり橄欖石玄武岩類が分布し、これらに深い関連をもつ石英玄武岩類

をも伴っているが、基盤は中新世ともいわれる砂岩、泥岩層が中部以北の海岸沿いに露出している。八幡半島長者原崎では、それよりも新しい湖成層と考えられる灰白～濃灰色砂岩と硅藻土頁岩の互層が発達し、中部以南では、鮮新世の灰白色泥岩層が発達している。

玄武岩類は流紋岩などの酸性岩類の活動が始つてから後のものであつて、角閃石を含むことが多く島内各地で見ることが出来る。この時期に堆積したと思われる礫質頁岩と砂岩の互層は、中部及それ以南の平坦地に広く発達し、多量の酸性岩類の礫を含んでいる。これらの上下関係は、第三紀層と岩石類を不整合に覆う洪積層が局部的に見られるので、著しい時代の差はないように思われる。しかし玄武岩類の数次の噴出については、その間に堆積層を含んでいるところから、かなり時間的な差があつたことは否めないところである。そして、これらの活動は玄武岩について4期さらにそれ以前の流紋岩類について2期に分けて考えることができよう。

3. 水と島人との歴史

沓岐島が今日のような海拔になる以前、現在の深江田原の沖積土の下は海岸の砂や礫の層であるところから考えると、曾てはこの水田盆地は海岸であり、入江であつたろうことは疑えないところである。その後の軽微な隆起に伴つて一般地形の麓は急崖となり、侵蝕

* 沓岐田河小学校長

が準んで海崖が発達し、一方内陸では深江田原が湖水化して、盛んに堆積が行なわれ、その排水口として、坊主橋以下の新しい谷が刻まれたが、河口から遂次坊主橋までの侵蝕の様子は老岐に於ける隆起と侵蝕の復活を示す唯一の地形であるといえる。

由来老岐島には湧水しないと伝えられる湧水が、主として玄武岩のしゅう曲の向斜部に湧いている。これらは昔から「かわ」と呼ばれ、島人の命の綱となっていて、その効果性の高いことは、勤善懲悪の多くの伝説となっている。その名のきこえたものに、渡良の干水、お手水、常盤川、樋の川、養川、橋川、美濃の谷などがある。これらは何れも、地表湧水か、岩間の湧水で、年中湧れることがなく、長期の旱天続きでも、こんこんと湧いているので、台地の上や中腹に住んでいる人にとっては信仰的な存在となり、毎年の梅雨明け、土用前に「カワサラエ」と称して、関係住民は相俟って、附近の雑草を払い、泉を深えて、水神を祭り、その湧水に感謝し、また今後の絶えざる湧水を祈念し合って、互に一献を交える風習を醸し出している。以って水が如何に島人の生活に恵みの糸を垂れているかを知ることができるであろう。このような全く自然にして天与の湧水のみを頼っていた生活は、古い代官屋敷か、武家屋敷を除く全島の住民が経験したところであろう。徳川時代後半頃から、老岐島の開発計画が、食糧生産に乏しい平戸藩の食糧供給源として、強く推し進められるにつれて、土民の2、3男に対して、新地屋敷の設定を許されるようになった。その際、既墾の水田や畑を用いることは許されなかったため、山林や原野を拓いて屋敷を作り、附近に田畑を設けて、生活源を確保するようになった。これが全島に現在民

家の散点する基をなしたが、日常の生命を支える「水」のことについては、強く意識されなかったものようで、ただ一途に、割抽を確保することに専念したと思われる。おそらく徳川末期から昭和初期にかけて、これら点在屋敷は、各々競って井戸を掘り、手近に用水を充足しようと努めた。しかし井戸水の耐用度は決して一様ではない。筆者が近時島の水利について調査を始めてから、偶然ではあったが、潤湯する井戸をもっている点在屋敷は87例中81戸、即ち93%は180年位より古い墳墓をもたないのである。概して言えることは新地屋敷の井戸は、湧水のおそれが多分にあるということ、更に言うならば、長期の干天続きや、干期（1月、2月頃）に湧れるようら井戸をもっている家は、歴史的にあまり古くないということである。これはその家々の墓地について観察すれば、容易に首肯し得るところである。

かくて、現今の点在屋敷は、殆んど井戸をもっており、その普及度はおよそ90%に達している。

時代の推移による要求は、この島の中にも波及し、生活の能率化という見地乃至文化的な要請として、島の隅々にまで電力が行きわたり、手燭やランプから完全に解放された。その上ラジオ、テレビが生活に直結するようになった今日では、深い井戸から釣瓶綱を手繰って水を掲げる生活様式では満足しなくなり、井戸から電力揚水の方法を採り入れたり、湧れ易い井戸は廃して、ボーリングによって深層の地下水を確保し、自家用のみならず小規模ながら灌漑用水として利用することが逐次導入されるようになった。それ故、大体昭和30年頃をさかいとして人々の生活程度は、その質において急速に文化的水準を高めつつある。